

阪神・淡路大震災から15年を迎えようとしています。あのとき、ベトナム出身の人たちは「避難所」という言葉は知らなくても、火が迫る病院から病人を運び出しました。茶髪の、よくコンビニの前でたむろしていた中学生は、バケツに水を入れてお年寄りのところに運んで活躍しました。いずれも日常的な生活の中で、情報が十分に得られなかったり、学校を停学になつていたり、社会から何らかの理由で、排除されたり切り捨てられたりしている経験を持つ、「少数者」と言われる人たちがたかもしれません。

心のこもった「ルール」

吉富 志津代

を決める時にすべての人の意見がきちんと取り入れられたのかどうかは考えない。ここが「日本」だから、「学校」だから、そこにいたければ、この「ルール」を守れと。そのため、少数者たちは、頑張っているひと握りの人以外は活躍するチャンスがありませんでした。

もちろん人びとが協調して暮らす社会では「ルール」は大切です。しかし、忘れてはいけないのは、地域にこんな多様な人が住んでいるのに、ひとりひとりの意見や考えを公平に聞いてきた心のこもった「ルール」であるかどうかではないでしょうか。多数決という原理を盾に「多数者」だけに有利なものになっていないでしょうか。それを理

由に誰かを排除してはいないでしょうか。完璧な「ルール」はたぶん存在しないのだと思います。だからこそ、それをいっつも考え直すプロセスを持つことで、多様な人たちが互いに理解でき、共感できるのです。そのプロセスで社会が少しずつ成熟していくのでしょうか。震災で私はそのことに気づかされたのでした。

随想

よしとみ・しづよ N P
O 法人多言語センター
FCIL 理事長。1957年南あ



2010
1/12

国境を越えた踊りの輪

吉富 志津代

スペインに、「ベンボス 夕子ども共和国」という、子どもたちがサーカスをして暮らす共同体があります。1956年に、ある神父が貧しくて教育が受けられず職もない青少年の自立支援のために設立し、その後、サーカス団も結成、学校や民芸品工房、テレビ局も作りました。

93年夏に日本の市民団体が、全国で公演をしてみらうために、サーカス団の青少年83人を招聘しました。神戸では、カトリック鷹取教会で歓迎会が開かれ、私はボランティア通訳としてかかわりました。実際に会うまで、何となくかわいそうなイメージを抱いていたのですが、サーカスで世界に平和のメッセージを伝えるという誇りと自信に満ちた、底抜けに明るい雰囲気、感銘を受けました。

10日間の公演が終わり、教会のそばにある大公園での夏祭りが、彼らの送別会となりました。公園の真ん中に櫓が建てられ、地域の人たちの盆踊りの輪にサーカス団の青少年やボランティアの若者たちも入り、お返しにと、サルサダンスを若者男女みんなで踊ったのでした。町の人たちにとっても初めての経験で、夢のように楽しく、忘れることができない光景でした。その1年半後に地震が起きて町は無残な姿になり、大

国公園も焼けたのでした。それから10年以上たった夏祭りには、たて焼きや焼きそばと並んでベトナム春巻きや韓国チヂミやペルー焼き鳥の屋台が並びました。盆踊りの輪の中で、ベトナム人やブラジル人も楽しそうに踊っていました。

鷹取教会のある神戸市長田区は、外国出身の人たちがたくさん住んでいます。が、それまで一緒に夏祭りを楽しんだことはなかったのです。地震でみんなつらい思いをしたけれど、ベトナムの子ともたちが来なくても、あの光景が見られる町になったのでした。

(よしとみ・しづよ N P 法人多言語センター FCIL 理事長)

随想

よしとみ・しづよ N P 法人多言語センター FCIL 理事長

1/7

神戸市長田区にある「FMわいわい」は、震災を契機に始まったコミュニティ放送局だ。情報発信の必要性を感じた市民たちで立ち上げた「りっぱな海賊放送局」が、震災の1年後に認可を得て正式開局するときは「太平洋にイカダでこぎだす気分」であったという自身のコメントが、当時の神戸新聞にも載った。

コミュニティ放送局というのは、FMラジオ局のうち、地域を放送エリアとして、まちの活性化に役立つことを目的とする。

FMわいわいの開局は全国で25番目だが、今では235局になった。先日、FM三木とFM宝塚との共同で「コミュニティラジオ・地域の中で果たす役割と可

地域が支えるラジオ局

吉富 志津代

「能性」というシンポジウムを開催した。この模様は、2月15日から21日までの間に、兵庫県内11局のコミュニティ放送局で特別番組として放送される。

災害時、身近な情報を提供するという大切な役割は、言うまでもない。マスメディアと大きく違うのは、情報を提供する側と受ける側という一方通行ではなく、受け取った側も発信する双方の関係性にある。つまり、住民自身が発信に参加し、市民活動を促進するコミュニティの道具や場としてのメディアなのだ。そしてFMわいわいは、住民の中でも発信する機会が少ない、少数者として地

域に暮らす障がい者や外国出身者たちの視点を大切に、10言語の多文化・多言語の放送局である。運営/経営をするのも市民自身で、それを支えるのは、カトリック教会や仲間のNPOなど。このように、公的な役割を果たしている放送局であっても、継続させるためのしくみや制度がまだないので、多くの人の協力が要る。

随想

(よしとみ・しづよ) NPO法人多言語センター F ACIL理事長

3/12

震災の年は「ボランティア元年」と言われ、「NPO法人」の制度実現につながった。NPO法人は、新しい公共サービスの担い手として、行政と一緒に事業をすることも少なくない。それは「NPOと行政の協働」ということでは表現される。私もこのタイトルで全国の自治体職員の方には話をする機会がある。

しかし、「協働」とは具体的にどういうことをいうのだろうか。「協働」と表現しても、実際は委託や請負契約という形になる。

自治体が担うサービスを専門業者に委託する場合も多いが、NPOが、営利目的の業者やコンサルタント会社とは違った視点で専門性を高めてきた結果、さま

「協働」とNPO

吉富 志津代

さまざまな分野の委託先になっている。例えば、公共施設の管理、情報の多言語化、各種セミナーの実施、調査事業など。同じ費用でも、NPOの場合は市民自身、市民自身による、市民自身のための確かなサービス内容である。

しかし、「協働」は、さまざまな課題を抱えていることも否めない。先日も私たちが委託されて、企画から広報や実施まで中心的な役割を果たしたセミナーがあった。当初は、こちらに専門性があるから「お願い」されたが、私たちが「お願い」も願ってない活動の機会でも、まさに「協働」だと思

随想

(よしとみ・しづよ) NPO法人多言語センター F ACIL理事長

3/1

2010.3.16

1997年2月、7カ月のユーラシア大陸を越える旅の途中、インドに1カ月半滞在した。ゴルカタ、ダージリン、バラナシ、デリーなどを訪れた。法律上は既に存在しないはずのカーブ制度が実際には残る社会で、たくましく暮らす多様な人々がいた。物こいをする子ども、あふれる観光客と客引き、道はたて生括する人、そこを歩く牛たち、その合間をぬって走るリクシャー（人力車）の運転手などなど。

13年ぶりのインドで

吉富 志津代

先達の都市だと思つて訪れたバンガロールは、13年前のインドのイメージとほとんど変わっていません。その身に生まれただけあふれるさまざまな人々が、たくましく生活している。たとえ経済的に底辺で暮らしていても、その中で悟ったようにしたたかに生きる人たちが。そのあと訪れたチェンナイでは、タリット（カーブ）制度のもとで最下層のカーブ外に位置づけられた人々の反差別社会運動の拠点にも行った。職業も制限されて水もないところで、前にも売られていた。世界のような格差をあらためて実感したのだ。人々、2日ばかりでレン

随想

(よしとみ・しづよ) PO法人多言語センターFACIL理事長

2010.4.1

前回、少し紹介したが、1996年9月から7カ月間、ほとんど飛行機を使わずに船とバスと列車で、夫とふたりで隣の韓国からトルコまでバックパッカーとして旅をした。その間、神戸市長田区のコミュニティ放送局「FMわいわい」で電話中継しながら「ユーラシアを越えて」という番組を生放送で週に2回ずつ続けた。

ユーラシアを越えて

吉富 志津代

てくれタクシーで行きたいところまで送ってくれた。ただ恐縮するばかりだが、貧乏旅行の私たちにできるお礼はないかと尋ねると「日本では、イランといえは『偽造テレホンカードを売っていた人たち』と言われるのが非常に残念。あれはほんの一部の人がしたことで、ほとんどのイラン人はまじめに働いて、おかげで戦争からの生活再建もできた。あなたは、そのイラン人のイメージを変えて、私たちが日本に大変感謝していることを伝えてほしい。」と言われた。その気持ちはよくわかるので当時の生放送でも伝えた。私は機会があること

随想

(よしとみ・しづよ) PO法人多言語センターFACIL理事長

先日、知り合いのベトナム人が亡くなったという知らせを聞いた。ある朝、自宅近くのコンビニの前の道で行き倒れていたという。確か、まだ40代後半だったと思う。もし自宅で亡くなっていたら、まちがいに「孤独死」だったから、道で見つけてもらってよかった、という声が聞こえた。

彼はベトナム戦争後、難民として日本に渡ってきた。神戸で震災に会い、避難していたテント村では、ベトナムでの本職だった墓石作りの技術を生かして、その器用さでテント生活の手助け役として活躍した。しかし日常生活に戻るとつれ、患っていたアルコール依存症がひどくなり、生活はすさんでいった。それ

あるベトナム人の死

吉富 志津代

でも人なつこい笑顔で時々、私たちの活動拠点に、おみやげ持参でやってきたことを思い出す。それは、たいてい盗品だったらしい。

彼の人間としての弱さを批判することは簡単かもしれない。同じような境遇でも頑張っている人はたくさんいる。でも戦争さえなければ、そう思うとやるせない。彼の死後、住んでいた部屋から、気にかけてくれた人たちへのお詫びを綿々とうつぶつたベトナム語の手紙がたくさん見つかったという。

いろいろな背景があつて、同じ「まち」に暮らしている人たち。「寂しいん

随想

(よしとみ・しづよ) N
PO法人多言語センターF
ACIL理事長)

2010.4.16